

I 調査の設計と概要

1 調査の設計に係る基本的な考え方

(1) 調査の目的

ア（調査の内容）全ての杉並区立学校児童・生徒に、幼児教育を基礎とした義務教育を通じ、学び方を本質とした人生と社会の基盤となる学力を確実に育む観点から、①基礎的・基本的な知識及び技能の習得状況、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成状況、③主体的に学習に取り組む態度や個性を生かした多様な人々との協同に関する自己意識等を把握する。

イ（結果の活用）調査結果は、公教育の持続的な構造転換を実現するための基礎研究の一環として、①児童・生徒が学びを振り返り、成長の糧とすること、②教員が教授・支援・共同探究や評価の行為を省察し、多様な人材との協働を基盤に個別に選ぶ・探究に浸る・協同して共に生きる系統的で連続的な学びの実現を図ること、③教育行政が行財政施策としての人材と組織、施設・設備等から支える学びを評価し、実情に応じた学校づくりと学びを通じた協治のまちづくりを支援すること等に活用する。

(2) 調査の対象・方式、内容

ア 対象・方式

対象	方式
小学校第3・4学年児童、中学校第1学年生徒	悉皆
小学校第5・6学年児童、中学校第2・3学年生徒	各学校の希望利用

※ 特別支援学校及び小・中学校の特別支援学級在籍の児童・生徒のうち、①下学年の内容などに代替して指導を受けている場合、②知的障害である児童・生徒に対する教育を行う特別支援学校の教科の内容の指導を受けている場合は、対象としないことを原則とする。

イ 内容

名称	内容
特定の課題に対する調査 (教科等に関する調査)	国語科、算数・数学科、理科、外国語 ・学習指導要領に準拠し、当該教科等における①調査実施の前学年の目標・内容(事項)を出題趣旨とし、②本質知に迫る学習活動に即した出題内容と回答形式、採点規準による設問から構成 ※各教科の1単位時間に位置付けて実施
意識・実態調査 (学習・生活についてのアンケート)	自己意識、生活実態、学習状況 ・①自らの道を拓く【自己効力感(自由の感度)】【自己の受容(自己承認の感度)】、共に生きる【他者への/からの受容(相互承認の感度)】等の自己意識、②【基本的な生活習慣】等の生活実態、③【学び方】【個別/探究/協同の学び】等の学習状況を観点・領域とした自己評価項目から構成 ※学級活動の1単位時間等に位置付けて実施

(3) 学習指導要領に準拠した【系統性】の理解に基づく【連続性】を確保した設問

ア 出題趣旨の決定と設問レベルの設定

教科等に関する調査の設問は、第一に、義務教育 9 年間を通じた目標・内容(事項)の【系統性】と学習評価の観点に基づき、出題趣旨と設問レベルを決定する。

基礎 C と B として設定する設問は、100%の(準)通過率を目標とする、つまり、全児童・生徒に確実に習得させる「基礎的・基本的な知識及び技能」を出題趣旨とする。活用 A や S は、全児童・生徒により一層の育成を目指す「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」を出題趣旨とする。

設問レベル		出題趣旨		全設問に占める割合
活用	活用 S	調査実施の前学年の	自ら活用する能力	35%程度
	活用 A		思考力・判断力・表現力	
基礎	基礎 B	目標・内容(事項)	主として基礎的・基本的な技能	65%程度
	基礎 C		主として基礎的・基本的な知識	

イ 出題内容と回答形式、採点規準の設定

第二に、趣旨とレベルを踏まえ、学習指導要領が定める目標・内容(事項)を系統的に実現し、見方・考え方を中核とした学び方を育む【連続性】を確保した学習活動によっておのずと(準)通過できるように、出題内容と回答形式、採点規準を設定する。

〔(設問の例)中学校第2学年外国語「聞いた話の要点をメモする」設問〕

- 出題趣旨：エ 書くこと(ウ) 聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想、賛否やその理由を書いたりなどすること。【外国語理解の能力】
- 設問レベル：活用 S(「自ら活用できる」状況で(準)通過できる設問)
- 出題内容：(リスニング)これから、スピーチをします。その後、三つの質問をします。スピーチ文と質問は通して読み、もう一度繰り返して読みます。
〔中略〕放送を聞きながら、メモ欄に必要なメモを英語で書きなさい。
- 回答形式：記述
- 採点規準：複合条件(設定複数の条件のうち、満たした条件数で(準)通過を評価)
- 見方・考え方を中核とした学び方を育むコミュニケーション活動の展開例：

学習活動	○指導事項 ☆留意点	学習活動に即した具体的な評価規準【観点】(方法・材料)
3 空港でのアナウンスを聞き、搭乗に必要なことを英語でメモする。 〔以下はメモの視点例〕 ・ゲート ・搭乗の開始時刻 ・出発時刻 等	○聞いたことについて(英語で)メモをとること。 ☆スペリングミスにこだわらず、文の流れに乗ってメモをとるように促す。	・うまく書けないところがあっても、聞いたことを英語でメモし続けようとしている。 【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】 ・聞いたことを英語でメモしている。【外国語理解の能力】 (観察・メモ)

2 調査結果に基づく学習状況の評定、結果の取扱いと活用

(1) 学習指導要領に準拠した設問レベルに基づく学習状況の評定

教科等に関する調査の結果は、基本統計量として、平均正答率やその標準偏差、(準)通過数分布、設問ごとの(準)通過率を算出するとともに、下表の考え方にのっとり、調査実施の前学年の学習状況を、目標＝学習指導要領に準拠して5段階に評定する(以下、「学習状況の評定」若しくは「学力段階」という。)。これは、「測定結果の10%程度は誤差」という紙面を用いた学力測定的一般性質を踏まえ、尺度設計を「連続」から「順序」へと転換、学力・学習状況を「段階評価」しようとする取組である。

目標に準拠した段階評価の導入により、①義務教育における学びの到達水準を具体的な設問を通して一定程度明らかにできる、②調査結果と実際の学力・学習状況の対応関係に対するアカウントビリティが向上するなどの効果が期待でき、③集団や個に応じた改善方策がより一層明確になる。さらに、④取組の成果や課題を、他集団との比較や競走、すなわち集団に準拠した相対評価によらず目標＝学習指導要領に準拠して絶対的に評価できるようになり、これによって本調査は、「杉並区教育ビジョン2012」が志向する共創のための「コミュニケーションツール」となる。

	活用Sの設問群を(おおむね)通過	R5
	活用Aの設問群を(おおむね)通過	R4
最低限の到達目標⇒	基礎Bの設問群を(おおむね)通過	R3
	基礎Cの設問群を(おおむね)通過	R2
	基礎Cの設問群を(おおむね)通過できない	R1

(2) 各学習状況の評定の趣旨

学習指導要領の実現状況を意味する5段階の学習状況の評定(学力段階)の趣旨は、小学校段階での3段階の評定に即し概括した場合と合わせ、以下のとおりである。

“R3”は、「最低限の到達目標(水準)」と換言できる。R3の評定基準の算出には基礎CとBの設問を用いており、C・Bの設問は、義務教育9年間で全児童・生徒に確実に習得させる「基礎的・基本的な知識及び技能」を出題趣旨とするからである。

状況段階	評定の趣旨		3段階評定に概括した場合
R5	調査実施の前学年の目標・内容(事項)	発展的な力が身に付いている	3
R4		十分定着がみられる	
R3		おおむね定着がみられる(最低限の到達目標)	2
R2		特定の内容でつまずきがある	1
R1		学び残しが多い	

(3) 結果の取扱いと活用

ア 結果の取扱い

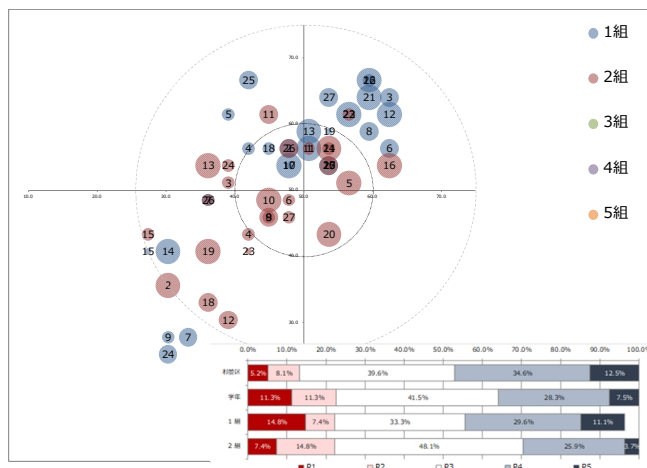
調査結果は、実施教科等が限られていることや、児童・生徒の自己評価によるものであることなどから、あくまで、学力・学習状況の一部分を紙面によって測定したものと捉える必要がある。とりわけ連続尺度上の1単位(得点1点や正答率1%)の差は、測定誤差を考慮すれば、教育的に意味のある学力差でない可能性が高い。

イ 結果の活用

結果の活用に当たっては、上述を踏まえ、本調査の主たる役割を「学力・学習状況を目標＝学習指導要領に準拠しておおまかに段階分けする」ことと捉える必要がある。それゆえ最も重視すべき指標は学習状況の評定(学力段階)であり、その結果はさらに、日常的な観点別学習状況をはじめ様々な教育情報と併用することが望ましい。付言すると、本調査の正答率は「参考指標」としてのみ算出しており、連続尺度を仮定し正答率そのものを「代表指標」にする学力調査とは根本的に設計が異なる。

また、調査結果は、クロスバブルチャートやヒートマップに処理したものも合わせて参照し、学年や校種、学校と地域を超えた協働に活用することが期待される。

[クロスバブルチャート：学力分布と意識・実態調査の回答を重ね合せた例]



- 左図は、横軸に「国語科」、縦軸に「算数・数学科」の標準化得点を取り、「学校の先生は自分のことを認めてくれていると思う」項目に肯定的に回答している個ほどバブルサイズが大きくなるよう処理した「クロスバブルチャート」である(p.175を参照)。
- バブル内の数値は一人一人の「出席番号」を表しており、各軸の教科等とバブルサイズを表す質問項目は校務情報端末上で動的に選択できるようにしてある。
- 直観的に、否定的回答をしている個が中下位層に分布している様子が分かる。学力段階(右下)を合わせて参照することで、学年や学級、個々の状況の理解が促進する。

[ヒートマップ：児童・生徒数を指標に学校規模(小学校)を表現した例]



- 左図は、児童・生徒数を指標に「学校規模(小学校)」を表現した「ヒートマップ」である。杉並区の地図を背景とし、相対的に規模が大きい/小さい学校が立地する地域ほど色が赤く/青くなるよう処理してある。
- 「特定の課題に対する調査(教科等に関する調査)」のみならず、「意識・実態調査(学習・生活についてのアンケート)」の結果もその多くをヒートマップ化して学校に提供している。
- 活用の際には、赤/青の色付けが杉並区立学校における相対的な高/低であることを踏まえるとともに、様々な要因を「学校・地域の強み」に読み替える視点をもち、立場を超えたコミュニケーションのツールとなることが期待される。

3 調査の概要

(1) 調査期間

平成 30 年 5 月 8 日(火)から 10 日(木)までの 1 日を、各学校が選択して実施

※ 調査期間は、原則、連続した 3 日以上 5 日以内の学校授業日をもって設定する。

(2) 調査を実施した児童・生徒数、学校数

	小学校			
	第 3 学年	第 4 学年	第 5 学年	第 6 学年
児童・生徒	3,399 人	3,290 人	3,294 人	3,129 人
学校	41 校		41/41 校	41/41 校

(3) 各調査の設問数

ア 特定の課題に対する（教科等に関する調査）

①国語科 ※全体に占める設問割合を（ ）内に示してある。

分類		小学校				
		第 3 学年	第 4 学年	第 5 学年	第 6 学年	
全体		16	18	18	18	
基礎 活用	基礎	基礎 C	5 (31.3%)	5 (27.8%)	5 (27.8%)	5 (27.8%)
		基礎 B	5 (31.3%)	6 (33.3%)	6 (33.3%)	6 (33.3%)
	活用	活用 A	3 (18.8%)	4 (22.2%)	4 (22.2%)	4 (22.2%)
		活用 S	3 (18.8%)	3 (16.7%)	3 (16.7%)	3 (16.7%)
観点	国語への関心・意欲・態度		出題対象としない			
	話す・聞く能力		2 (12.5%)	2 (11.1%)	2 (11.1%)	2 (11.1%)
	書く能力		3 (18.8%)	3 (16.7%)	3 (16.7%)	3 (16.7%)
	読む能力		8 (50.0%)	10 (55.6%)	10 (55.6%)	10 (55.6%)
	言語についての知識・理解・技能		3 (18.8%)	3 (16.7%)	3 (16.7%)	3 (16.7%)
領域	音声・言語事項		5 (31.3%)	5 (27.8%)	5 (27.8%)	5 (27.8%)
	説明的文章		4 (25.0%)	5 (27.8%)	5 (27.8%)	5 (27.8%)
	文学的文章		4 (25.0%)	5 (27.8%)	5 (27.8%)	5 (27.8%)
	表現		3 (18.8%)	3 (16.7%)	3 (16.7%)	3 (16.7%)

中学校			
第1学年	第2学年	第3学年	
1,966人	2,003人	2,025人	児童・生徒数
23校	23/23校	23/23校	学校数

※小学校第3・4学年、中学校第1学年は悉皆調査
 ※小学校第5・6学年、中学校第2・3学年は各校の希望利用

中学校			分類		
第1学年	第2学年	第3学年			
18	16	16	全体		
5(27.8%)	4(25.0%)	4(25.0%)	基礎C	基礎	基礎 活用
6(33.3%)	5(31.3%)	5(31.3%)	基礎B		
4(22.2%)	4(25.0%)	4(25.0%)	活用A	活用	
3(16.7%)	3(18.8%)	3(18.8%)	活用S		
出題対象としない			国語への関心・意欲・態度		観点
2(11.1%)	2(12.5%)	2(12.5%)	話す・聞く能力		
3(16.7%)	3(18.8%)	3(18.8%)	書く能力		
10(55.6%)	9(56.3%)	9(56.3%)	読む能力		
3(16.7%)	2(12.5%)	2(12.5%)	言語についての知識・理解・技能		
5(27.8%)	4(25.0%)	4(25.0%)	音声・言語事項		領域
5(27.8%)	5(31.3%)	5(31.3%)	説明的文章		
5(27.8%)	4(25.0%)	4(25.0%)	文学的文章		
3(16.7%)	3(18.8%)	3(18.8%)	表現		

※中学校第1学年は、出題が前学年(小学校)の範囲のため、
 小学校の観点・領域を用いて調査を構成している。

②算数・数学科 ※全体に占める設問割合を（ ）内に示してある。

分類			小学校			
			第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
全体			22	22	25	25
基礎 活用	基礎	基礎 C	6 (27.3%)	6 (27.3%)	7 (28.0%)	7 (28.0%)
		基礎 B	9 (40.9%)	9 (40.9%)	10 (40.0%)	10 (40.0%)
	活用	活用 A	5 (22.7%)	5 (22.7%)	6 (24.0%)	6 (24.0%)
		活用 S	2 (9.1%)	2 (9.1%)	2 (8.0%)	2 (8.0%)
観点	算数への関心・意欲・態度		出題対象としない			
	数学的な考え方		8 (36.4%)	8 (36.4%)	10 (40.0%)	10 (40.0%)
	数量や図形についての技能		7 (31.8%)	7 (31.8%)	7 (28.0%)	7 (28.0%)
	数量や図形についての知識・理解		7 (31.8%)	7 (31.8%)	8 (32.0%)	8 (32.0%)
領域	A 数と計算		9 (40.9%)	9 (40.9%)	9 (36.0%)	9 (36.0%)
	D 数量関係		6 (27.3%)	6 (27.3%)	7 (28.0%)	7 (28.0%)
	B 量と測定		3 (13.6%)	3 (13.6%)	3 (12.0%)	3 (12.0%)
	C 図形		4 (18.2%)	4 (18.2%)	6 (24.0%)	6 (24.0%)

③理科 ※全体に占める設問割合を（ ）内に示してある。

分類			小学校			
			第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
全体				20	20	
基礎 活用	基礎	基礎 C		7 (25.0%)	7 (25.0%)	7 (25.0%)
		基礎 B		7 (35.0%)	7 (35.0%)	7 (35.0%)
	活用	活用 A		4 (20.0%)	4 (20.0%)	4 (20.0%)
		活用 S		2 (10.0%)	2 (10.0%)	2 (10.0%)
観点	自然事象への関心・意欲・態度		出題対象としない			
	科学的な思考・表現			7 (35.0%)	7 (35.0%)	7 (35.0%)
	観察・実験の技能			6 (30.0%)	6 (30.0%)	6 (30.0%)
	自然事象についての知識・理解			8 (40.0%)	8 (40.0%)	8 (40.0%)
領域	A エネルギー			7 (35.0%)	3 (15.0%)	5 (25.0%)
	B 粒子			2 (10.0%)	8 (40.0%)	4 (20.0%)
	C 生命			6 (30.0%)	4 (20.0%)	6 (30.0%)
	D 地球			5 (25.0%)	5 (25.0%)	5 (25.0%)

中学校			分類		
第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年			
25	25	25	全体		
7(28.0%)	6(24.0%)	6(24.0%)	基礎 C	基礎	基礎 活用
10(40.0%)	11(44.0%)	11(44.0%)	基礎 B		
6(24.0%)	6(24.0%)	6(24.0%)	活用 A	活用	
2(8.0%)	2(8.0%)	2(8.0%)	活用 S		
出題対象としない			数学への関心・意欲・態度		観点
10(40.0%)	9(36.0%)	9(36.0%)	数学的な見方や考え方		
7(28.0%)	11(44.0%)	11(44.0%)	数学的な技能		
8(32.0%)	5(20.0%)	5(20.0%)	数量や図形などについての知識・理解		
8(32.0%)	13(52.0%)	11(44.0%)	数と式 A		領域
8(32.0%)	2(8.0%)	4(16.0%)	関数 C		
	3(12.0%)	3(12.0%)	資料の活用 D		
3(12.0%)	7(28.0%)	7(28.0%)	図形 B		
6(24.0%)					

中学校			分類		
第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年			
20	20	20	全体		
7(25.0%)	7(25.0%)	7(25.0%)	基礎 C	基礎	基礎 活用
7(35.0%)	7(35.0%)	7(35.0%)	基礎 B		
4(20.0%)	4(20.0%)	4(20.0%)	活用 A	活用	
2(10.0%)	2(10.0%)	2(10.0%)	活用 S		
出題対象としない			自然事象への関心・意欲・態度		観点
7(35.0%)	7(35.0%)	7(35.0%)	科学的な思考・表現		
6(30.0%)	6(30.0%)	6(30.0%)	観察・実験の技能		
8(40.0%)	8(40.0%)	8(40.0%)	自然事象についての知識・理解		
2(10.0%)	5(25.0%)	5(25.0%)	エネルギー A		領域
6(30.0%)	5(25.0%)	5(25.0%)	粒子 B		
7(35.0%)	6(30.0%)	6(30.0%)	生命 C		
5(25.0%)	4(20.0%)	4(20.0%)	地球 D		

※中学校第 1 学年は、出題が前学年(小学校)の範囲のため、
小学校の観点・領域を用いて調査を構成している。

④外国語 ※全体に占める設問割合を（ ）内に示してある。

分類			小学校															
			第3学年	第4学年	第5学年	第6学年												
全体			対象学年 としない															
基礎 活用	基礎	基礎 C																
		基礎 B																
	活用	活用 A																
		活用 S																
観点	コミュニケーションへの関心・意欲・態度																	
	外国語への慣れ親しみ																	
	言語や文化に関する気付き																	
領域																		

イ 意識・実態調査（学習・生活についてのアンケート）

①自己意識・生活実態 ※各設問（質問項目）と観点の対応は、pp.132-145.を参照

領域	観点	設問数
自己 意識	学校生活の充実度	4
	自己効力感(自由の感度)	6
	他者への受容(相互承認の感度①)	3
	他者からの受容(相互承認の感度②)	4
	自己の受容(自己承認の感度)(自己肯定感)	3
	主体的な学び(内発的な学習意欲)	4
	時間的展望	3
	道徳的実践力	5
	生命尊重体験	3
	国際社会への関心・関わり	3
	住んでいる地域への関心・関わり	4
	集合的(社会)効力感 (相互承認(触発)の感度③)	4 ※全て複数領域に該当する設問
生活 実態	基本的な生活習慣	4
	規律ある学校生活	2
計		48

※複合領域の設問が含まれるため、各領域の設問数合計が全体数を超える。

第 1 学年	中学校		分類		
	第 2 学年	第 3 学年			
対象学年 としない	25	25	全体		
	6 (24.0%)	6 (24.0%)	基礎 C	基礎	基礎 活用
	11 (44.0%)	11 (44.0%)	基礎 B		
	5 (20.0%)	5 (20.0%)	活用 A	活用	
	3 (12.0%)	3 (12.0%)	活用 S		
	出題対象としない		コミュニケーションへの関心・意欲・態度		
	11 (44.0%)	8 (32.0%)	外国語表現の能力		
	16 (64.0%)	19 (76.0%)	外国語理解の能力		
	7 (28.0%)	7 (28.0%)	言語や文化についての知識・理解		
	8 (32.0%)	5 (20.0%)	聞くこと ア		
	5 (20.0%)	5 (20.0%)	話すこと イ		
	7 (28.0%)	13 (52.0%)	読むこと ウ		
	7 (28.0%)	4 (16.0%)	書くこと エ		

②学習状況、部活動への所属状況

観点		設問数
学習 状況	学習成果の実感	2
	学習方略一般(学び方)	6
	個別の学び(学びの個別化)	7
	探究の学び(学びの探究化)	3
	協同の学び(学びの協同化)	7
	読書冊数	1
	学習時間	4 ※平日/休日、自己/塾・家庭教師等
	言語活動(国語科)	6
	算数・数学的活動(算数・数学科)	5
	問題解決活動(理科)	5 ※小学校第4学年以上
	コミュニケーション活動(外国語)	1 ※小第6学年、中第1学年 9 ※中学校第2・3学年
	ICT利活用(情報モラル含む)	5
部活動への所属状況		1 ※中学校第2・3学年のみ
計		43～61

③「杉並区教育ビジョン 2012」が掲げる「目指す人間像」「育みたい力」と
自己意識・生活実態領域の観点の関連

杉並区教育ビジョン 2012		意識・実態調査	
目指す人間像	育みたい力	自己意識・生活実態領域の観点	
自らの道を開く人 夢に向かい、志をもって	1 自分のもち味を見付け、自ら学び、考え、判断し、行動する力	主体的な学び(4) (内発的な学習意欲) 時間的展望(3)	学校生活の充実度 (4)
	2 変化の時代を捉え、たくましく生きる心と体の力	☆自己効力感(6) (自由の感度)	
		☆自己の受容(3) (自己承認の感度)(自己肯定感)	
5 持続可能な社会を目指し、次代を共に支えていく力	国際社会への関心・関わり(3) 住んでいる地域への関心・関わり(4) ☆集合的(社会)効力感(4) (相互承認(触発)の感度③)		
地域・社会・自然と共に生きる人 「かかわり」を大切にし、	3 豊かな感性をもち、感動を分かち合う力	生命尊重体験(3)	
	4 他者の存在を認め、多様な関係を結ぶ力	☆他者への受容(3) (相互承認の感度①)	
		☆他者からの受容(4) (相互承認の感度②)	
		道徳的実践力(5)	

※ () 内の数値は、各領域に含まれる質問項目数を示す。

※ ☆ は、各目指す人間像・育みたい力において中核となる概念を示す。

Ⅱ 調査結果の概要

1 杉並区教育ビジョン 2012 に準拠した調査結果の読み解き方

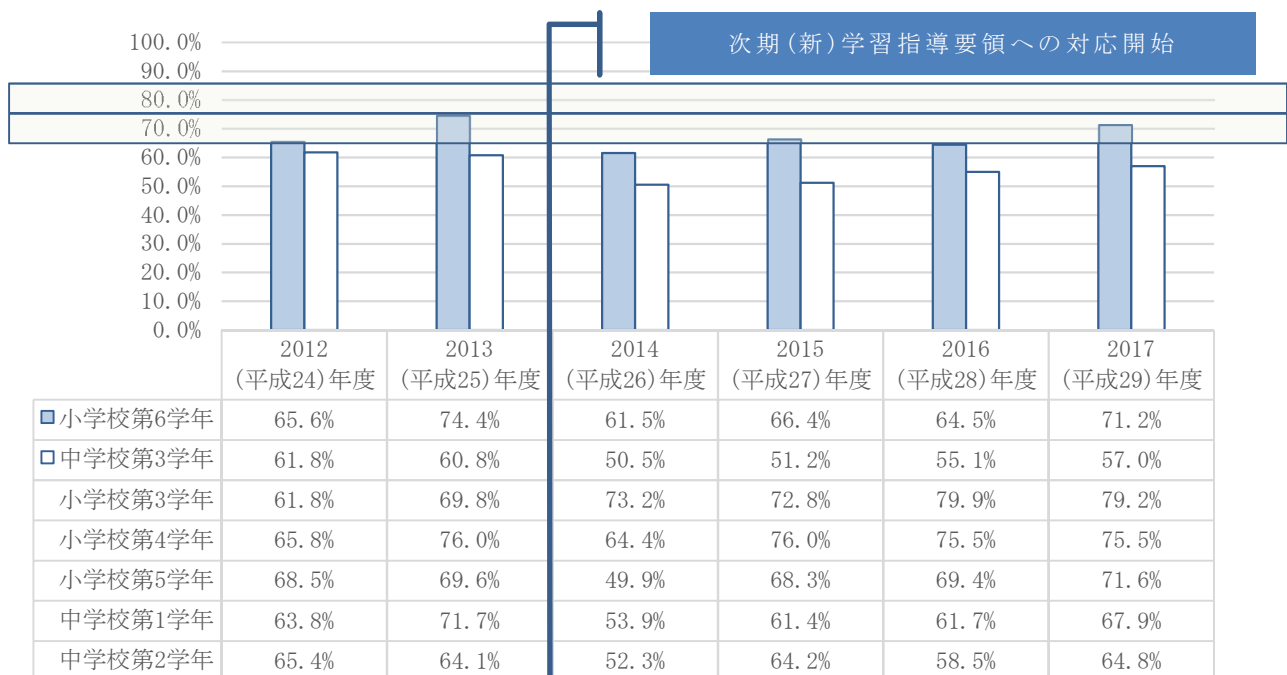
(1) 杉並区教育ビジョン 2012 と杉並区独自の学力等調査

杉並区独自の学力等調査である「特定の課題に対する調査、意識・実態調査」は、公教育の持続的な構造転換を実現するための基礎研究の一環で実施している。ここで、本調査の目的(p.2)にも記す「公教育の構造転換」について補説すると、その本旨は、区の新たな「基本構想(10年ビジョン)」を受け 2012(平成24)年に策定した「杉並区教育ビジョン 2012」に掲げている。すなわち、今後10年を見据えた目指す教育である「共に学び共に支え共に創る教育」を通じ、不可分に支え合う二つの人間像「自らの道を拓く人」「共に生きる人」を実現する社会制度を目指すものであり、そのロードマップとなる実行計画は「杉並区教育ビジョン 2012 推進計画」にまとめられている。

推進計画は、「I 学びをつなげ、切れ目のない教育を進めます」を筆頭とした七つの目標から構成される。そして、目標 I の達成指標の一つに設定されるのが、本調査から導出の「中学校第3学年 R3 以上の生徒の割合」^[i]である。しかしこの指標には、人生と社会の基盤となる学力のうち、基礎的・基本的な知識・技能、中でも紙面で測定可能な範囲しか含むことができない。よって 2021 年度の目標値 80% (以上)も、その先に、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力等はもちろん、後述する「学び方」を本質としたこれからの時代に必要となる学力を見据えなければならない。

こうした考えの下、2014(平成26)年度からは、「知識基盤」「予測困難」に象徴される時代に求められるより高度な思考力等、つまり各教科等の本質たる「見方や考え方」を考慮した調査とした。それは次期(新)学習指導要領を見据えた調査への移行と同義であり、同年度の結果全般が 2013(平成25)年度より低いのはこのためである。

(3) 「杉並区教育ビジョン 2012 推進計画」の目標に準拠した調査結果の経年



[i] 推進計画での指標名は「杉並区立中学3年生の学習習熟度」としている。

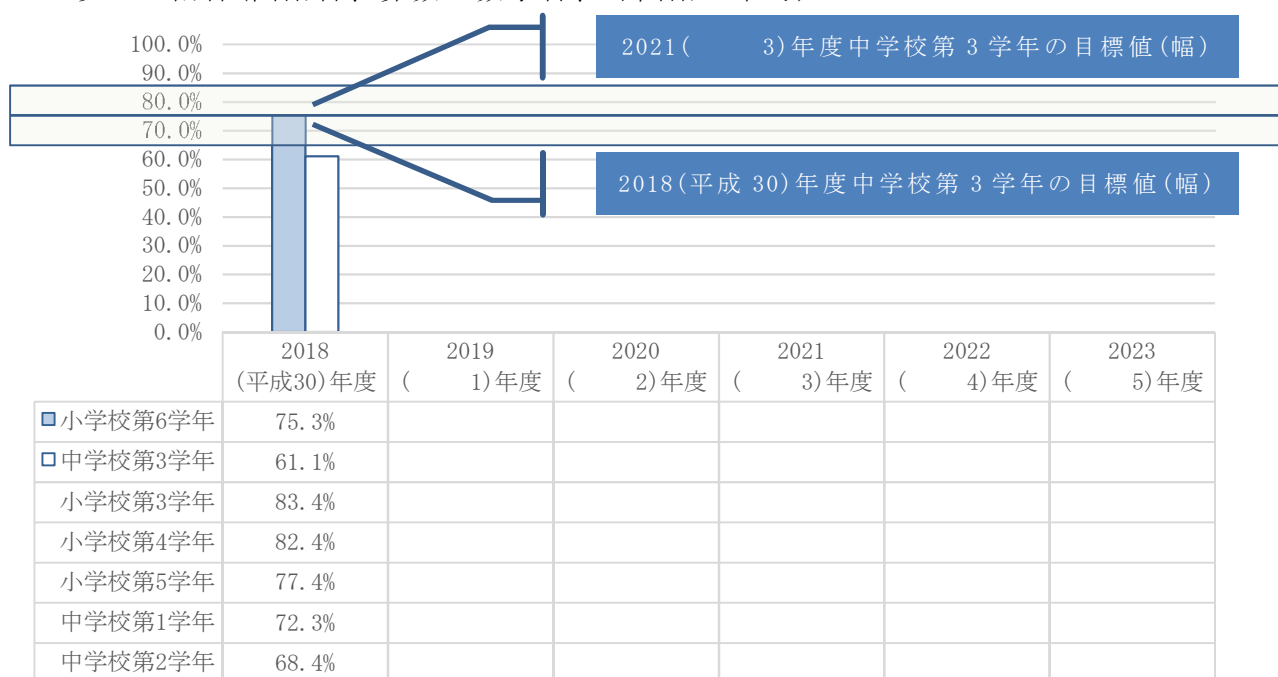
(2) 授業改善から学びの構造転換へ

さて、上記を踏まえつつ 21 世紀最初の 20 年ほどを振り返ると、杉並区立学校の風景が大きく変わったことに気付く。特にビジョン 2012 の策定前後からは 20 世紀末以降の新自由主義、公教育を「提供されるサービスの消費」とする価値の転換を目指した。あらゆる人々の参画と協働による、共に学び支え創る「学びのまち」。学びを通じた協治のまちづくりの力が地域に育ち、学校が物理的な場のみならず「学びを通じた連帯」を意味する可能性の未来。このとき学力の中心には、教科等の本質たる見方や考え方のみが置かれるのではない。自らが拓く道と共に生きるまちの課題を、他者と協同することを含め自分(たち)なりの方法で探究する学び方。各教科等の見方・考え方を中核とし、万象とのやりとりに知を認識して活用するこの力にこそ、人生と社会の基盤がある。

そして、このような意味での学力を育むためには、「授業改善」という言葉に潜んだ教員主体の暗黙たる視点を自覚的に転換し、一人一人に異なる多様な学習者の視点に立ってひたむき学びの展開を想像することが必要になる。すなわち、授業改善から「学びの構造転換」へ^[ii]。幼保小連携や小中一貫で培った目標・内容の【系統性】の理解に基づく方法の【連続性】の確保。その基盤となる多様な人材の【協働】。これらを前提条件とする【個別】に選ぶ、【探究】に浸る、【協同】して共に生きる学びへの転換は、教員に、知の教授や活動の支援はもちろん「解の共同探究」を要請する。教員-児童生徒という立場すら超え成長を触発し合うことが、ひいては、行財政への信託による公教育制度を「支援協治の学びの機会の網の目」へ転換していく最初の一步となる。

本調査の結果は、ビジョン 2012 に準拠したこうした視点下に読み解く必要がある。

※R3 以上の割合(国語科、算数・数学科、外国語の平均)



[ii] 『すぎなみ 9 年カリキュラム—総合的な学び編』、pp. 58-64. など

2 国語科 特定の課題に対する調査

(1) 5段階の学習状況の評定(学力段階)

校種・学年		平均	全体に占める各学習状況の児童生徒の割合				
			R1	R2	R3	R4	R5
小学校	第3学年	3.41	5.2%	8.1%	39.6%	34.6%	12.5%
	第4学年	3.29	4.7%	8.6%	51.2%	23.6%	11.9%
	第5学年	3.19	5.1%	12.5%	51.4%	20.5%	10.5%
	第6学年	3.13	4.8%	15.1%	52.5%	17.1%	10.5%
中学校	第1学年	3.00	6.9%	15.5%	56.0%	14.4%	7.2%
	第2学年	3.07	6.3%	18.0%	52.9%	8.7%	14.3%
	第3学年	2.93	6.2%	25.1%	47.0%	13.0%	8.7%

0.0% 20.0% 40.0% 60.0% 80.0% 100.0%

※学習指導要領に準拠した調査実施の前学年の学習状況の評定(学力段階)

R5 発展的な力が身に付いている R4 十分定着がみられる

R3 おおむね定着がみられる(最低限の到達目標)

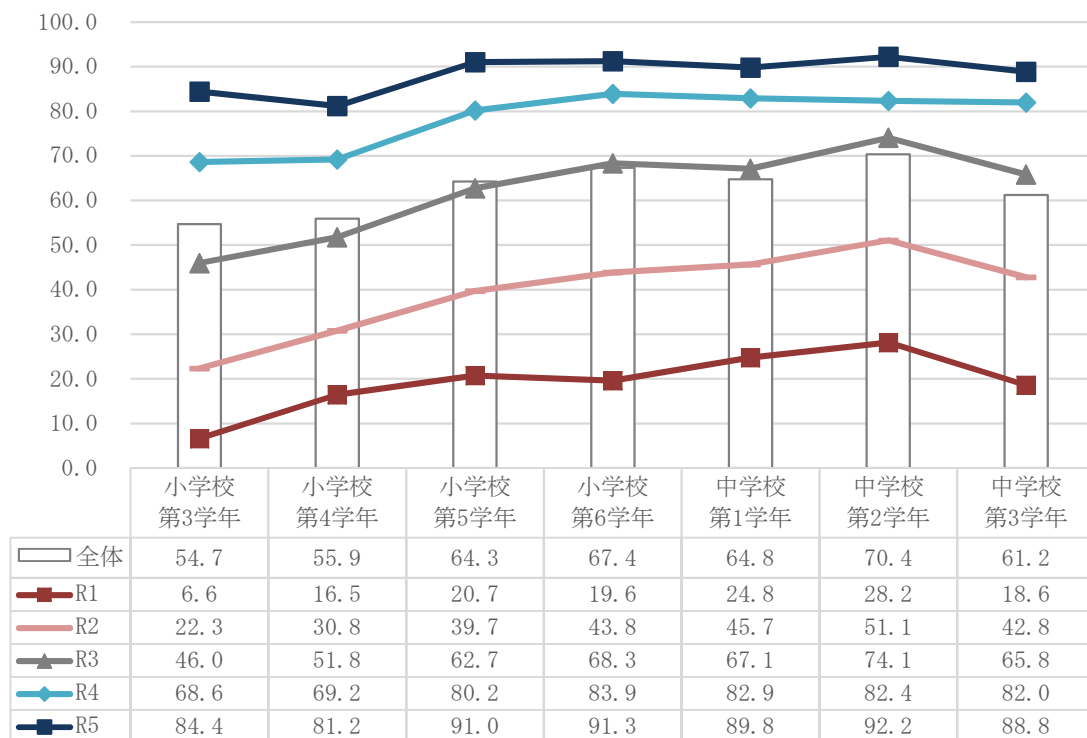
R2 特定の内容でつまずきがある R1 学び残しが多い

(3) 基礎・活用別、観点別、領域別の平均正答率 ※()内は標準偏差を示す。

分類			小学校			
			第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
全体			54.7(21.4)	55.9(17.1)	64.3(18.4)	67.4(18.5)
基礎 活用	基礎	基礎 C・B	69.0	74.5	70.4	76.4
	活用	活用 A・S	30.8	26.6	54.6	53.2
観点	国語への関心・意欲・態度		調査対象としない			
	話す・聞く能力		75.9	84.6	92.1	86.1
	書く能力		55.4	39.7	59.7	64.2
	読む能力		48.2	46.0	64.8	63.2
言語についての知識・理解・技能		57.0	86.0	48.5	72.0	
領域	音声・言語事項		64.5	85.4	66.0	77.6
	説明的文章		41.8	49.6	63.4	73.9
	文学的文章		54.6	42.4	66.2	52.4
	表現		55.4	39.7	59.7	64.2

※平均正答率や標準偏差の単純な比較は、難易度の高低や正答率を代表指標としない調査の特性(p.5)上推奨しない。

(2) 学習状況の評定(学力段階)ごとの平均正答率(教科全体)

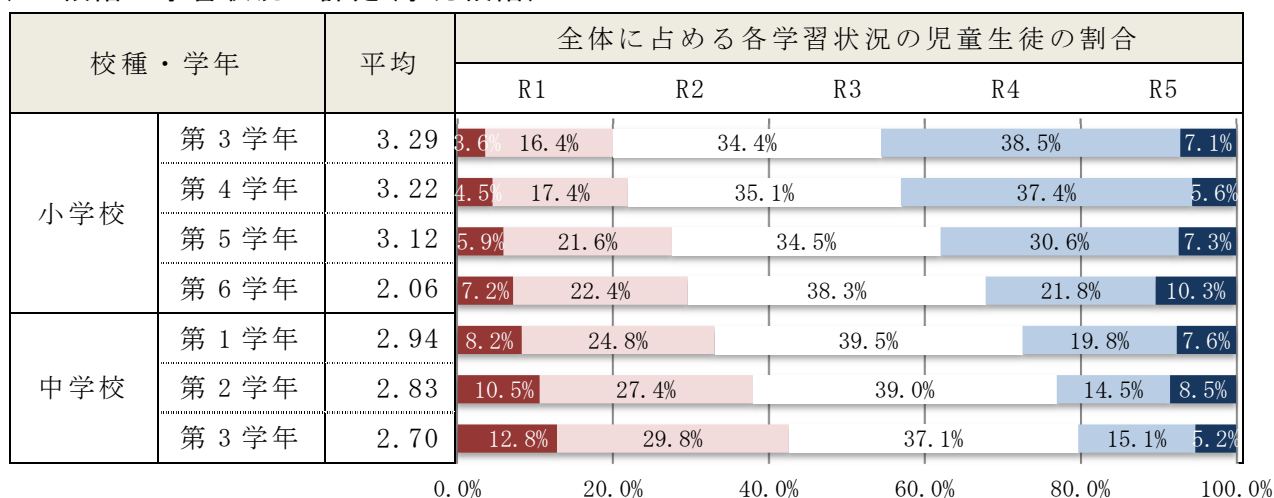


中学校			分類		
第1学年	第2学年	第3学年			
64.8(17.4)	70.4(17.9)	61.2(19.3)	全体		
73.4	73.7	67.3	基礎 C・B	基礎	基礎
51.3	66.1	53.3	活用 A・S	活用	活用
調査対象としない			国語への関心・意欲・態度		観点
81.6	78.2	67.6	話す・聞く能力		
33.6	74.2	48.4	書く能力		
69.2	69.9	61.1	読む能力		
70.0	59.1	74.3	言語についての知識・理解・技能		領域
74.6	68.6	71.0	音声・言語事項		
71.8	71.7	61.2	説明的文章		
66.6	67.7	61.0	文学的文章		
33.6	74.2	48.4	表現		

※中学校第1学年は、出題が前学年(小学校)の範囲のため、小学校の観点・領域を用いて調査を構成している。

3 算数・数学科 特定の課題に対する調査

(1) 5段階の学習状況の評定(学力段階)



※学習指導要領に準拠した調査実施の前学年の学習状況の評定(学力段階)

R5 発展的な力が身に付いている R4 十分定着がみられる

R3 おおむね定着がみられる(最低限の到達目標)

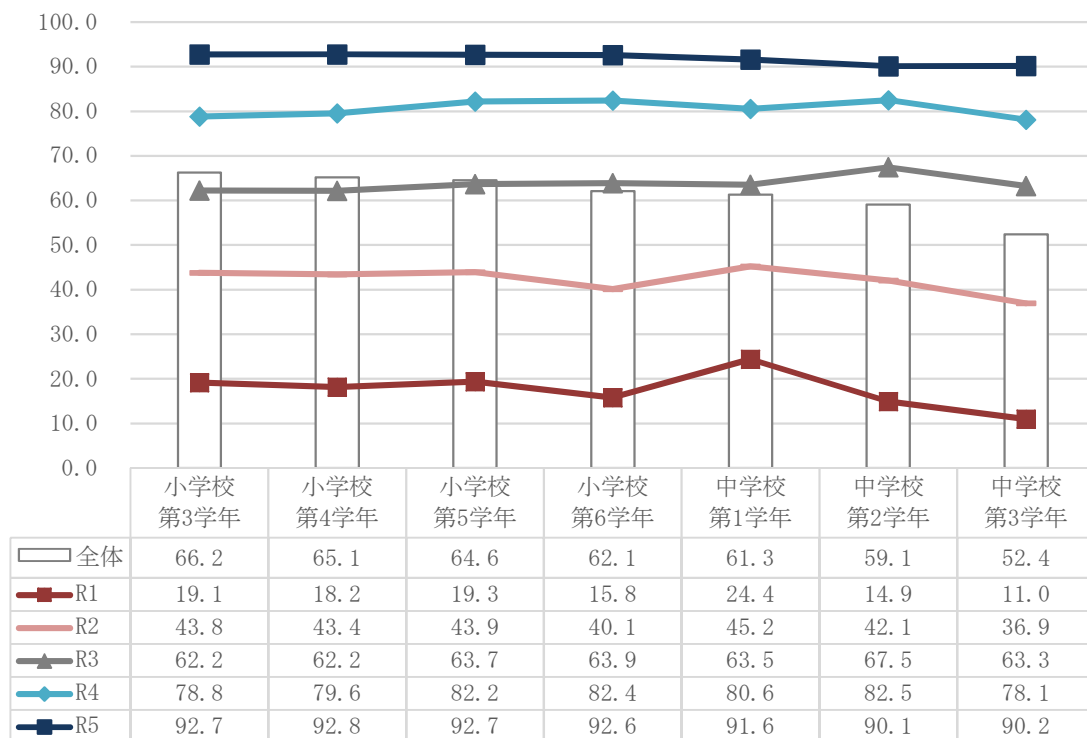
R2 特定の内容でつまずきがある R1 学び残しが多い

(3) 基礎・活用別、観点別、領域別の平均正答率 ※()内は標準偏差を示す。

分類			小学校			
			第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
全体			66.2(17.6)	65.1(18.4)	64.6(20.1)	62.1(22.4)
基礎 活用	基礎	基礎 C・B	79.0	78.8	77.4	71.6
	活用	活用 A・S	38.9	35.8	37.2	41.9
観点	算数への関心・意欲・態度		調査対象としない			
	数学的な考え方		41.2	39.9	45.2	46.8
	数量や図形についての技能		82.1	83.2	78.6	69.9
	数量や図形についての知識・理解		79.0	75.9	76.5	74.4
領域	A 数と計算		69.3	66.7	75.0	70.8
	D 数量関係		63.7	63.6	59.7	56.7
	B 量と測定		77.5	78.0	58.6	54.5
	C 図形		54.5	54.2	57.5	59.1

※平均正答率や標準偏差の単純な比較は、難易度の高低や正答率を代表指標としない調査の特性(p.5)上推奨しない。

(2) 学習状況の評定(学力段階)ごとの平均正答率(教科全体)

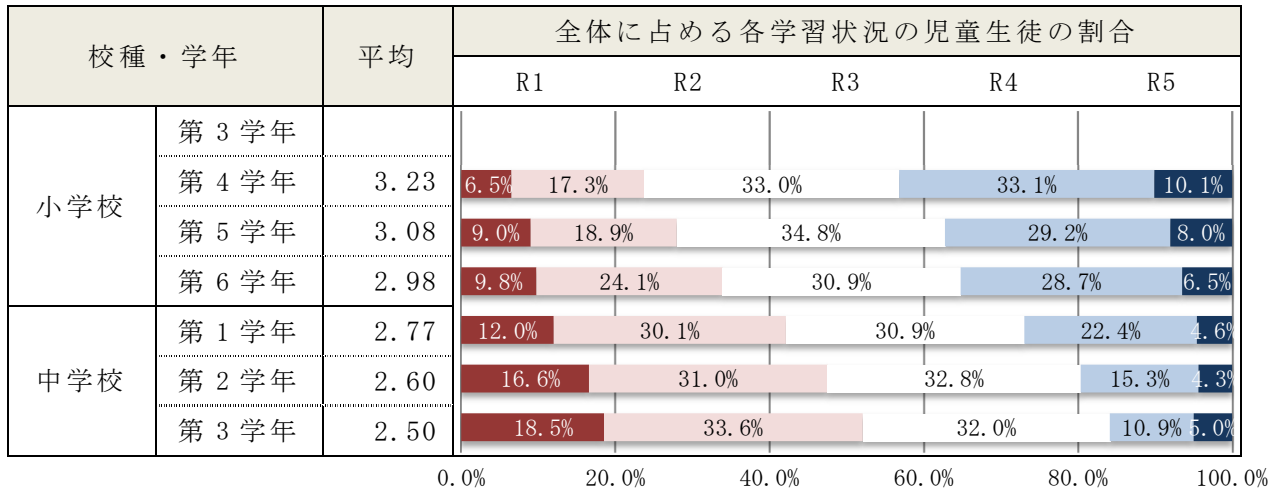


中学校			分類		
第1学年	第2学年	第3学年			
61.3(18.8)	59.1(23.0)	52.4(23.7)	全体		
75.4	69.6	64.0	基礎 C・B	基礎	基礎
31.2	36.7	27.7	活用 A・S	活用	活用
調査対象としない			数学への関心・意欲・態度		観点
35.5	41.0	28.4	数学的な見方や考え方		
78.6	69.1	65.7	数学的な技能		
78.3	69.4	66.3	数量や図形などについての知識・理解		
63.1	65.5	64.7	数と式 A		領域
59.2	52.5	42.6	関数 C		
	57.4	52.6	資料の活用 D		
66.6	49.7	38.5	図形 B		
58.9					

※中学校第1学年は、出題が前学年(小学校)の範囲のため、小学校の観点・領域を用いて調査を構成している。

4 理科 特定の課題に対する調査

(1) 5段階の学習状況の評定(学力段階)



※学習指導要領に準拠した調査実施の前学年の学習状況の評定(学力段階)

R5 発展的な力が身に付いている R4 十分定着がみられる

R3 おおむね定着がみられる(最低限の到達目標)

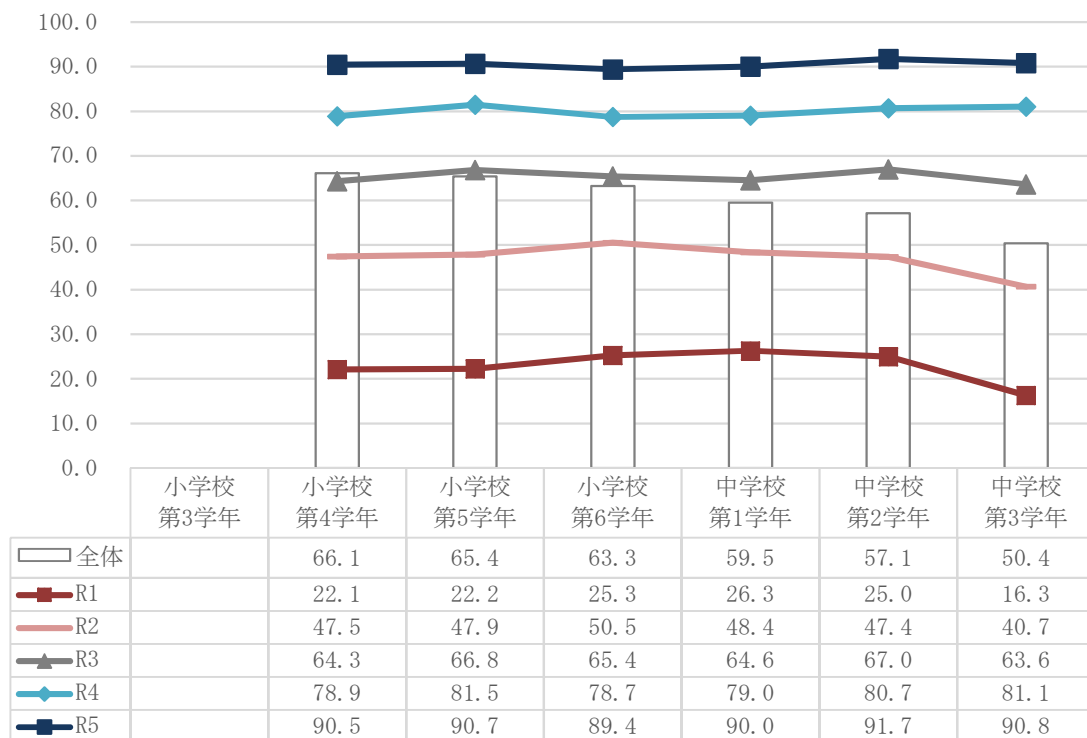
R2 特定の内容でつまずきがある R1 学び残しが多い

(3) 基礎・活用別、観点別、領域別の平均正答率 ※()内は標準偏差を示す。

分類			小学校			
			第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
全体				66.1(18.3)	65.4(19.9)	63.3(18.1)
基礎 活用	基礎	基礎 C・B	対象学年 としない	77.8	74.0	73.4
	活用	活用 A・S		38.9	45.4	39.7
観点	自然事象への関心・意欲・態度		調査対象としない	調査対象としない		
	科学的な思考・表現			42.3	48.8	45.0
	観察・実験の技能			72.2	74.2	74.1
	自然事象についての知識・理科			81.9	73.8	72.8
領域	A エネルギー			68.7	78.2	65.1
	B 粒子			70.1	55.4	77.6
	C 生命			68.5	76.6	62.8
	D 地球			58.1	64.7	50.6

※平均正答率や標準偏差の単純な比較は、難易度の高低や正答率を代表指標としない調査の特性(p.5)上推奨しない。

(2) 学習状況の評定(学力段階)ごとの平均正答率(教科全体)

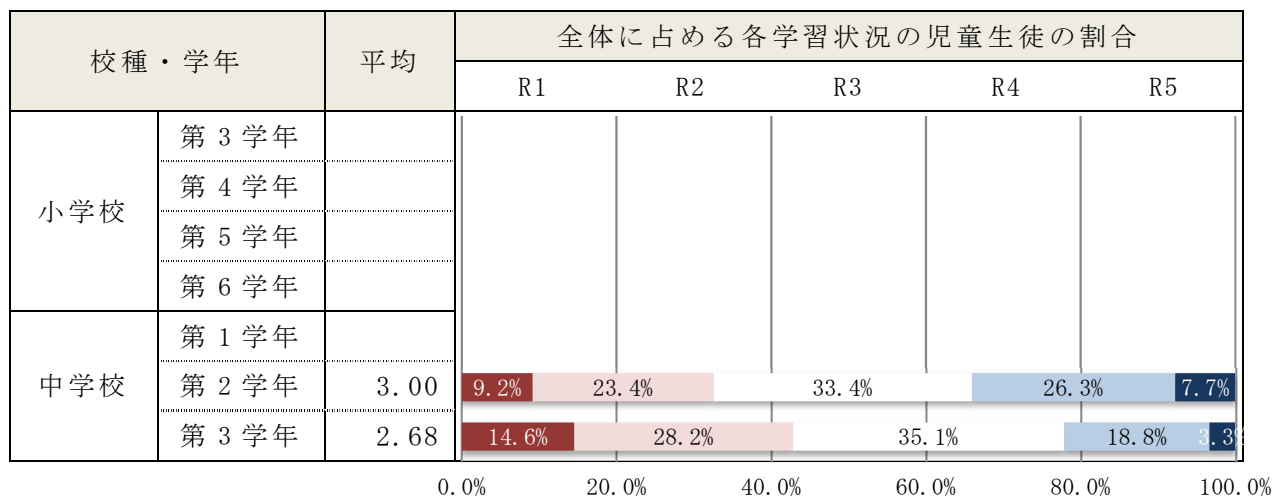


中学校			分類		
第1学年	第2学年	第3学年			
59.5 (18.3)	57.1 (20.2)	50.4 (23.1)	全体		
71.9	67.8	52.6	基礎 C・B	基礎	基礎
30.5	32.1	45.3	活用 A・S	活用	活用
調査対象としない			自然事象への関心・意欲・態度		
37.5	37.7	45.1	科学的な思考・表現		
77.9	60.8	47.3	観察・実験の技能		
67.4	73.1	56.5	自然事象についての知識・理科		
60.6	48.1	44.8	エネルギー A		
54.2	52.6	56.4	粒子 B		
60.1	68.1	47.4	生命 C		
64.6	57.5	54.3	地球 D		
			領域		

※中学校第1学年は、出題が前学年(小学校)の範囲のため、小学校の観点・領域を用いて調査を構成している。

5 外国語 特定の課題に対する調査

(1) 5段階の学習状況の評定(学力段階)



※学習指導要領に準拠した調査実施の前学年の学習状況の評定(学力段階)

R5 発展的な力が身に付いている R4 十分定着がみられる

R3 おおむね定着がみられる(最低限の到達目標)

R2 特定の内容でつまずきがある R1 学び残しが多い

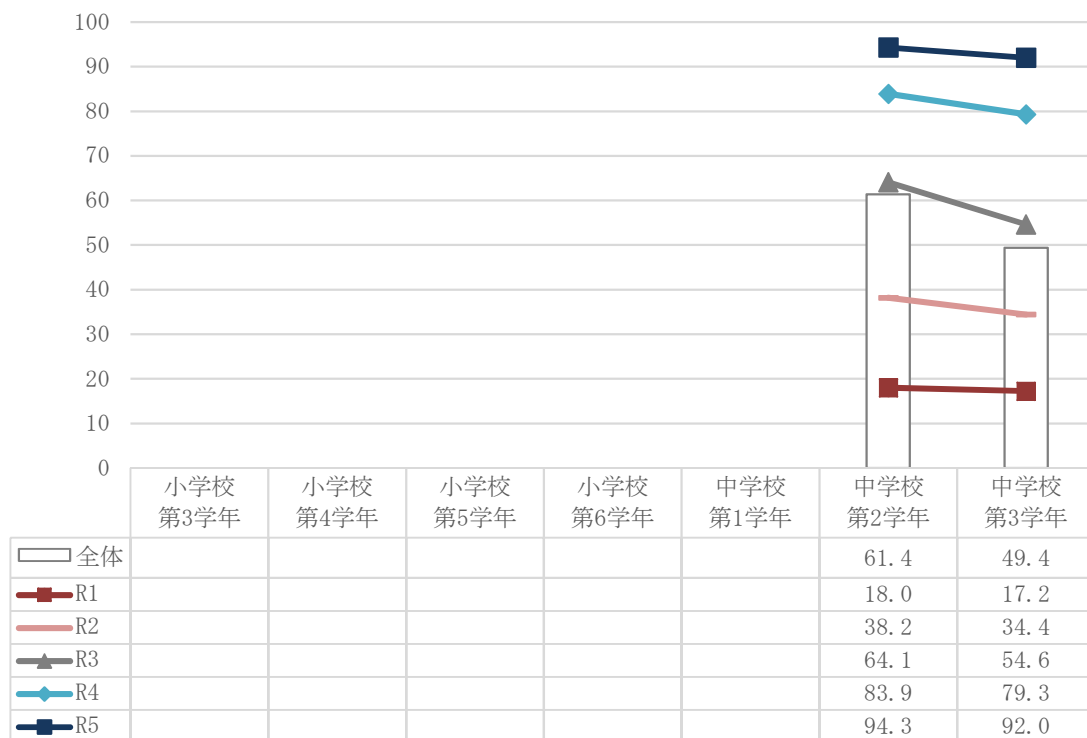
(3) 基礎・活用別、観点別、領域別の平均正答率 ※()内は標準偏差を示す。

分類			小学校			
			第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
全体						
基礎 活用	基礎	基礎 C・B				
	活用	活用 A・S				
観点	コミュニケーションへの関心・意欲・態度					
	外国語への慣れ親しみ					
	言語や文化に関する気付き					
領域						

対象学年
としない

※平均正答率や標準偏差の単純な比較は、難易度の高低や正答率を代表指標としない調査の特性(p.5)上推奨しない。

(2) 学習状況の評定(学力段階)ごとの平均正答率(教科等全体)

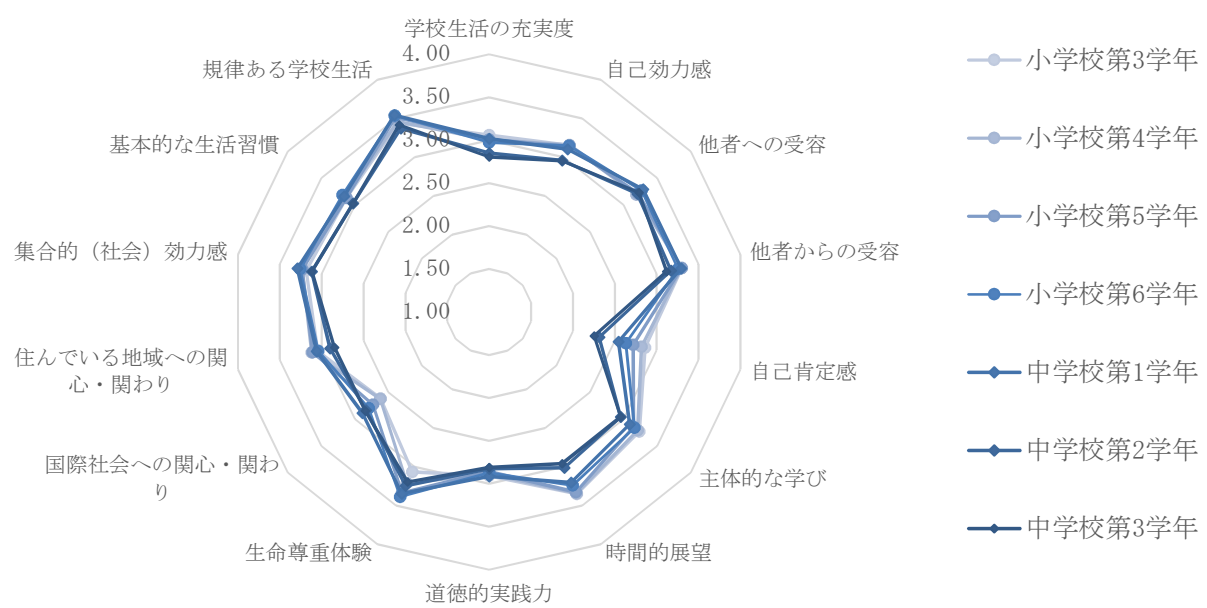


第 1 学年	中学校		分類		
	第 2 学年	第 3 学年			
対象学年 としない	61.4 (24.0)	49.4 (22.2)	全体		
	66.9	55.5	基礎 C	基礎	基礎
	49.7	36.3	活用 A	活用	活用
	調査対象としない		コミュニケーションへの関心・意欲・態度		
	54.5	42.7	外国語表現の能力		
	62.3	49.7	外国語理解の能力		
	69.3	68.4	言語や文化についての知識・理解		
	65.0	59.6	聞くこと	ア	領域
	70.6	54.6	話すこと	イ	
	59.4	48.0	読むこと	ウ	
44.0	22.6	書くこと	エ		

※中学校第1学年は、出題が前学年(小学校)の範囲のため、
小学校の観点・領域となる。

6 学習・生活についてのアンケート 意識・実態調査

(1) 自己意識、生活実態に係る観点の平均値



観点	小学校				中学校			
	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	第1学年	第2学年	第3学年	
自己意識	学校生活の充実度	3.06	3.01	3.01	2.97	3.02	2.85	2.81
	自己効力感 (自由の感度)	3.15	3.16	3.14	3.15	3.10	2.96	2.95
	他者への受容 (相互承認の感度①)	3.21	3.19	3.22	3.27	3.29	3.21	3.23
	他者からの受容 (相互承認の感度②)	3.30	3.29	3.30	3.26	3.29	3.17	3.12
	自己の受容 (自己承認の感度)(自己肯定感)	2.86	2.82	2.72	2.63	2.54	2.31	2.25
	主体的な学び (内発的な学習意欲)	3.24	3.21	3.15	3.16	3.09	2.96	2.96
	時間的展望	3.35	3.34	3.33	3.24	3.20	3.01	2.96
	道徳的実践力	2.90	2.89	2.86	2.87	2.91	2.82	2.81
	生命尊重体験	3.07	3.21	3.34	3.39	3.35	3.24	3.20
	国際社会への 関心・関わり	2.61	2.62	2.73	2.80	2.89	2.83	2.85
	住んでいる地域への 関心・関わり	3.05	3.12	3.11	3.04	3.06	2.90	2.85
	集会的(社会)効力感 (相互承認(触発)の感度③)	3.18	3.23	3.23	3.26	3.29	3.12	3.12
生活実態	基本的な生活習慣	3.13	3.15	3.13	3.18	3.16	3.03	3.03
	規律ある学校生活	3.44	3.46	3.52	3.54	3.54	3.37	3.42

※回答を肯定=4~否定=1と換算し、各領域に含まれる項目の回答結果を平均した値